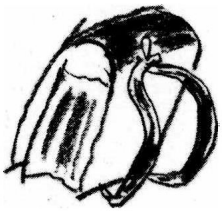
二学期

にくまれ魔法使い

平田圭子 作　　山中冬児 絵



新・子どもの文学

二学期にくまれ魔法使い

NDC 913　　偕成社　172p　23cm

発　行　1986年11月　初版第1刷

作　者　平田圭子

発行者　今村廣

発行所　株式会社偕成社

〒162 東京都新宿区市ガ谷砂土原町3の5

電話 (03)260-3221(販売部)3229(編集部)

振替　東京5－1352番

印　刷　新興印刷・小宮山印刷

製　本　株式会社常川製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-639140-2　　Printed in Japan

© Keiko HIRATA, Fuyuji YAMANAKA　1986

二学期

にくまれ魔法使い

平田圭子作　山中冬児絵

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

はじめに

なにもかも、うまくいかない日って、あるものです。
世の中ぜんぶが、わたしにむかって歯をむきだしてくるみたい。
二学期がはじまったある日、エイコにおとずれたのが、そんな〈魔の日〉でした。
ああ、だれかそばにいてくれるといいのだけれど。
さて、エイコのそばにやってきたのは、へんてこりんな、いばりんぼうの、にくまれ魔法使い……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二学期にくまれ魔法使い♠もくじ

とんでもない日　はじまる　8
ペンペラさまがやってきた　27
くさい、あやしい、おかしいぞ　43
じゅもんがいっぱい　57
千切りキャベツの巻　72
けしゴムかすの巻　87
チャレンジ！　魔法粉づくり　102
花よめ先生の宝もの　119
やっときた手紙　139
魔法使いのつうしんぼ　157
あとがき　172

作者・**平田 圭子**（ひらた けいこ）
神奈川県に生まれる。東京大学教養学部卒。出版社勤務を経て，現在，育児・教育問題をあつかうフリーランス・ライターとして活躍中。2児の母親。著書には『はじめての一年生』『親論ざっくばらん』『ＰＴＡほほえみ発見記』などの教育書などがあるが童話の出版は本書がはじめて。住所／志木市館1-6-7-404

画家・**山中　冬児**（やまなか　ふゆじ）
1922年，大阪に生まれる。大阪中之島洋画研究所卒業。日本美術家連盟，童美連会員。作品に『東京からきた女の子』『長いながい道』『二死満塁』『五年二組の占い専科』『五年二組の秘密クラブ』『五年二組の幽霊島』『きみはポパイになれるか』絵本『ぎおんまつり』など多数がある。住所／東京都世田谷区宮坂1-11-2

装丁協力／**山本利一**

二学期にくまれ魔法使い

平田圭子

とんでもない日 はじまる

1

わたしの家にペンペラさまがやってきたのは、九月十三日、金曜日のことでした。

その朝、お母さんはぷりぷり、おこっているように見えました。

「わざわざ十三日の金曜日にかえってくるなんて、パパったら、どうかしているんじゃない？　なにしろ十三時間も飛行機で飛びつづけなくてはならないのよ、ドイツから日本までかえってくるには。そのあいだに、もしも神さまがちょっとつかれて、いねむりでもしたら、飛行機はどうなると思う？　もしものことがあったら……ああ、ああ、どうしよう、まったくパパったら考えなしなんだから。」

朝ごはんのめだま焼きをつつきながら、ぶつぶつと、そんなことをいいつづけています。

「ぜったいにだいじょうぶだよ。もしも、神さまがいねむりしちゃっても、パイロットがのっているじゃないか。」

ケンタお兄ちゃんが、ママレードをたっぷりぬったトーストの、四まいめをパクパク食べながらいいました。

いつもなら、「ものを口にいれながら、しゃべってはいけません」と、やかましく注意するお母さんなのに、きょうはうわの空みたい。

「でもさ、そのパイロットがいねむりしちゃうことだって、あるでしょう?」

なんて、お兄ちゃんにいいがかりをつけています。

「みーんな、いねむりしちゃってもへいきさ。自動操縦装置、というのがいまの飛行機にはついていて、コンピュータだけで自動的に飛びつづけることができるんだよ。そのこと、知らなかったの? ママ。」

「知ってるわよ、そんなこと。だけど、ママはね、コンピュータなんて信用しないの。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

十三日の金曜日は、よくない日なのよ。むかしから、わるいことがおこるのはこの日にきまっているんですっ。」

「めいしんだよ、そんなこと。」

「めいしんでも、いやなことはいやなのっ。」

お母さんはコーヒーをぐいっとのみほしました。

なんだか、だだっ子がすねているみたい。

（きっと、ママは心配でたまらないんだわ。ああ、パパがはやくかえってくるといいのになあ。）

と、わたしは思いました。

十三日の金曜日のことは、わたしもすこし知っています。

――むかしむかしのずうっとむかし。神さまからこの世につかわされたイエス・キリストという人が、役人たちにつかまって殺されてしまったのが、十三日の金曜日だったのですって。それいらい、キリスト教を信じる人びとや国ぐにのあいだでは、〈魔の日〉として、きらわれているのですって――。

そうだ！　とつぜん、いいことを思いだしました。
「だいじょうぶよ、ママ。だって、うちはキリスト教じゃないもの。うちの神さまは〈歯の神さま〉だもの。神さまの種類がちがえば、十三日の金曜日も、魔の日じゃなくなるでしょう。ねっ、ママ。」
〈歯の神さま〉というとき、わたしはすこし声を小さくしました。
うちが、ほかの友だちの家とはちがって、キリストさまでも仏さまでもなく、〈歯の神さま〉を氏神としてまつっているのは、ちょっとかっこがわるいなあと、いつも思っていたからです。
――やっぱり、むかあし。うちのご先祖さまのおつかえする殿さまが、合戦にやぶれて死にました。すると、ご先祖さまは殿さまのあとを追い、海に飛びこんでいきました。
しばらくして、浜べにうちあげられたご先祖さまは、歯をくいしばって死んでいたそうです。人びとは感動して、ご先祖さまをまつり、それいらい〈歯の神さま〉として、いなかではたいせつにされているのだそうです――。

そういうりっぱなご先祖さまがいたおかげで、それから四百年たったいまも、うちはキリストさまではなくて、〈歯の神さま〉というわけでした。

でも、わたしがはずかしいと思うのには、理由がありました。なぜって、うちの神さまはとても大食いらしいのです。

うちには神棚がありますが、なにか行事があるたびに、山もりの米、山もりの塩、山もりの野菜をおそなえするのです。

（神さまにしちゃ、食べすぎだわ。）

と、それを横目で見るたびに、わたしは思いました。食べすぎの、ふとりすぎ、たいこ腹のポンポコリン神さまなんて、ききめがうすそうなんだもの。

でも、きょうばかりは、やせっぽちのイエスさまじゃなくて、ふとりすぎの神さまのほうで、ほんとうによかったと思いました。

「もうひとつ、いいこと思いだした！」

と、お兄ちゃんが手をたたきました。

「パパがドイツで飛行機にのったときは、まだ十三日にはなっていなかったはずだ。

時差があるから、ヨーロッパは一日まえの十二日なんだ。つまり飛行機の中にいる半分は十二日で、あとの半分だけが十三日になるんだ。

だからさあ、心配も半分になるでしょう、ママ。だいじょうぶだよ、パパはぶじにかえってくるさ。」

それまで、おでこに三本のしわをよせて、こわかったお母さんの顔が、やっとこさゆるんでにっこりとしました。

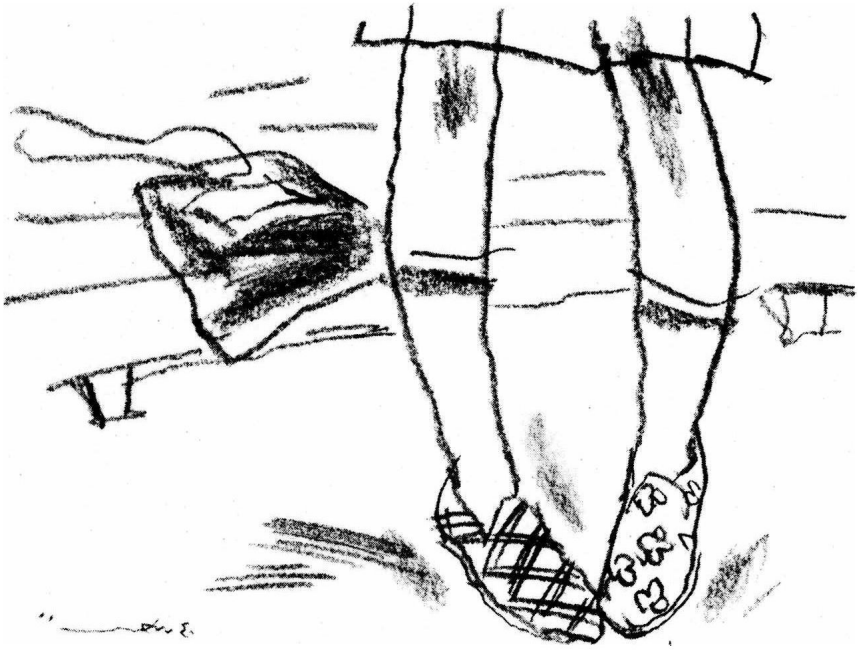
「ありがと。あなたたちのいうとおりだわ。ママも元気をだそうっと。

あっ、もうこんな時間。学校におくれちゃうわよ、さあ、いそげいそげ。」

時計の針は八時十五分をさしていました。さあ、たいへん。始業のチャイムまであと十分。

わたしとお兄ちゃんは大あわてでランドセルを肩にひっかけると、玄関を飛びだしました。かけてかけてかけて、体が風になっちゃったみたいに走りつづけました。

やっとこさ、学校のくつ箱にすべりこんだとき、キンコーンとチャイムの音。そのとたん、わたしは腰をぬかしそうになりました。右足と左足、べつべつのくつをはい



てきちゃったのです。

右足は青いこうしじまのズック。左足は黄色の花もようのズック。

あーあ、やっぱり十三日の金曜日は、〈魔の日〉なのかなあ。

2

心配したとおり、教室にはもっとわるいことがまっていました。

わたしの席は、仲よしのヒトミとならんでいます。一学期のさいごの週に、ゆり子先生が、

「すきな人どうしでならんでいいですよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com